

ケネー『経済表』の利用と展開

—マルクス再生産論における 2, 3 の問題について—

都 留 重 人

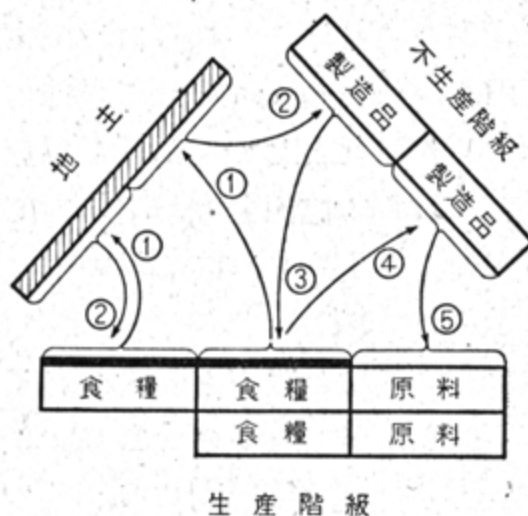
1

マルクスは「ケネーの経済表が大掴みに示しているのは、価値からみて一定した国民的生産の年生産物は如何にして、他の事情が同等不変な場合、その単純再生産すなわち同じ規模での再生産が行われうるように流通を通して分配されるか、ということである¹⁾」と云い、又「資本の生産過程ぜんたいを再生産過程として説明しようとするこの試みは、きわめて天才的な、何といっても最も天才的な思いつきだったのであって、それ以来、経済学がそのおかげを蒙ってきたものである²⁾」とほめ、みずからも、その再生産論の展開にあたっては、最初ケネーをまねた線分による図表を考慮したほどであった³⁾。しかし周知のとおり、結局マルクスはかれ独特の方程式表式をつくりあげたのであって、再生産モデルとしてのその便利さは、現在もなお失われていない。殊に単純再生産や拡大再生産の基本的ケースについての表式は、広く人口に膾炙して、マルクスが行った説明以上にこれを判りやすくすることは困難なくらいである。しかし同時に、同じ表式をもととしてマルクスが行ったやや複雑な再生産論上の問題となると、たとえば 600 C (IIa) だの (IIb) M だの 60M (a) だのという数字と記号の組合せがやたらに錯綜して、かえって理解が妨げられると思われる箇所が少なくない。むしろケネーの経済表にかえり、それを図化したものから再出発して解説しなおしてみたほうが、理解も容易であると同時に問題の所在もつかみやすいと思われるのである。本稿は、再生

産論上の 2, 3 の問題をめぐってのこうした試みである。

ケネーの経済表は交錯する線分と数字の組合せから成っているが、そこに示された構想をそのまま図化すれば第 1 図が得られる⁴⁾。この図は、交

第 1 図



換が行われる以前の状態ならびに矢印による流通の過程を示すものである。生産階級は、かれら自身の 5 億円(と、かりに呼ぶ)の価値ある総生産物をもっており、それは 3 億円の食糧と 2 億円の原料から成っている。そのほかに貨幣で 2 億円(太い実線で示す)があるが、これは、もっぱら交換の媒介として用いられ、ただ説明上の理由のために保有されていることを仮定するだけである。地主は何物も保有していないが、生産階級にたいして 2 億円の額——それは農業において生ずる純生産物の額に等しいもの——の地代を要求する権利をもつ。不生産階級は 2 億円の価値ある製造品を保有する。

まず最初に、生産階級は地主にたいして、貨幣で 2 億円の地代を支払う。この行為は、第 1 図において、太い実線から発して地主に向う 2 本の矢①であらわされる。その他の矢はすべて、この貨

1) マルクス『資本論』(長谷部文雄訳、青木書店) 第 2 部, p. 467.

2) マルクス『剰余価値学説史』(長谷部文雄訳、青木書店), I, pp. 499—500.

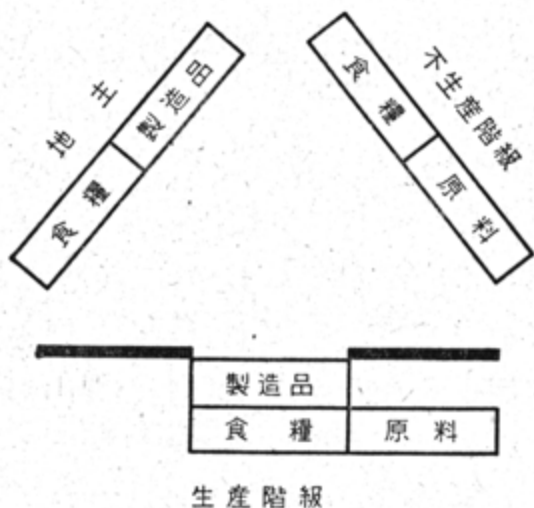
3) マルクスのエンゲルス宛手紙, 1863 年 7 月 6 日付参照。

4) 詳しくは拙著『国民所得と再生産』(有斐閣) 1951 年, pp. 211—14 参照。

幣が生産された財の流通をもたらすときの、貨幣の進む方向を示す。地主は1億円をもって、かれらの消費にあてる食糧を購入する(②)。これによって、生産階級が前に渡した貨幣の半分は、その出発点にもどってくる。地代収入の他の半分をもって、地主は不生産階級から製造品を購入し(③)、つぎに不生産階級は、この貨幣を生産階級からの食糧購入(④)に用いる。そこで生産階級は、この貨幣をもって不生産階級から製造品を購入する(⑤)。すると、不生産階級はこれをもって、生産階級から農産物(次の期間における原料として使用するため)を購入する(⑥)。かくして他の1億円の貨幣も、その起点に復帰するわけである。このほかに、生産階級は、かれら自身の生産物のうち、1億円をかれらの食糧として、他の1億円分のものを次期の原料として、かれら自身から「購入」する。これら2億円分は、階級内部の交換を形成するものであるから、図においては第2段のところに示されてある。

第2図は、すべての販売と購入が完了したのちにおける状態をえがいたものである。3つの階級

第 2 図



のそれぞれは、新しい生産期間に向ってすすむために必要な財貨を所有しており、また交換手段としての機能を果たした貨幣は、ふたたびその出発点にもどっている。

以上がケネー経済表の骨子を図化したものにほかならない。

2

マルクスの再生産表式の基本的なケースも、上のケネー経済表の図化にならって示しうるけれど、ここでは省略することとし⁵⁾、マルクスの再生産

論において消費財生産部門が「必要生活手段」と「奢侈品」という2つの亜部門に分けられたばあいを例にとって、表式の図化を試みてみよう。

単純再生産が想定されているから、表式は基本的には

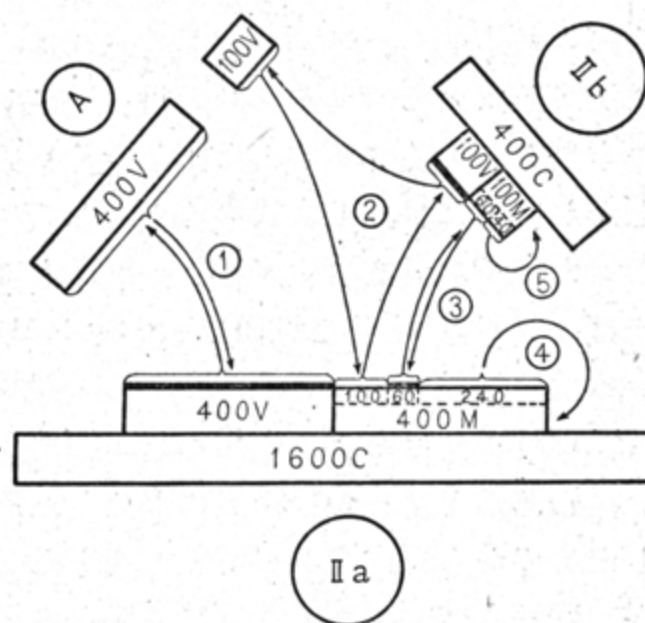
$$\begin{aligned} \text{I} & 4000C + 1000V + 1000M = 6000 \\ \text{II} & 2000C + 500V + 500M = 3000 \end{aligned}$$

であるが、第II部門が必要生活手段部門(IIa)と奢侈品部門(IIb)とに分れ、それぞれに対応して生産手段を供給する亜部門が存在すると見、第I部門も、必要生活手段のための生産財部門(Ia)と奢侈品のための生産財部門(Ib)に分れるとすると、表式はマルクスの数字例で次のとおりとなる。

$$\begin{aligned} \text{Ia} & 3200C + 800V + 800M = 4800 \\ \text{Ib} & 800C + 200V + 200M = 1200 \\ \text{IIa} & 1600C + 400V + 400M = 2400 \\ \text{IIb} & 400C + 100V + 100M = 600 \end{aligned}$$

そこで問題は、このばあいの社会的流通の態様であるが、この部分のマルクスの説明⁶⁾は必ずしも明快とは云いがたい。マルクスにしたがい、まず第II部門内での転態を明らかにするため、前節のケネー経済表を図化した方法を応用して図をえがいてみよう。第3図がそれである。

第 3 図



ここでは第I部門との取引が問題になっていないから、不変資本部分は第2段におき、労働者階級を示すAと、生活必要手段部門を示すIIaと、

5) 前同, pp. 214—18 参照。

6) マルクス『資本論』(長谷部文雄訳, 青木書店) 第2部, pp. 526—37 参照。

奢侈品部門を示す Iib とが向い合されている。太い実線や矢印のもつ意味は、前節のケネー経済表図化のばあいと同じである。またマルクスが設けた仮定により、資本家階級はその収入の5分の3を必要生活手段に、5分の2を奢侈品に支出するとする。すると、第II部門全体の中の転態は、第3図の矢印の番号を追って、次のように説明できる。

① 必要生活手段部門(Iia)の資本家は、あらかじめ用意した貨幣をもって、それを可変資本として使い、400Vだけの労働力を買う。すると労働者は、その支払われた労賃を使って、400Vだけの必要生活手段を資本家Iiaから買う。かくして貨幣は資本家Iiaに還流する。そしてこの還流は、マルクスが云うとおり、「種々なる関係産業部門の資本家たちの間の取引がいかに多数であろうとも、資本家階級IIのこの細部門a全体についていえば直接的である。」⁷⁾

② 「ところが細部門Iibについては事情が異なる。価値生産物のうち、ここで吾々が問題とする全部分Iib(v+m)は、奢侈品の現物形態で存在する。だから、この細部門に投下された可変資本を資本制的生産者の手に貨幣形態で復帰させる還流は直接的ではありえず、媒介的でなければならぬ。」⁸⁾そしてこの媒介過程は、第3図に見るとおり、まずIib資本家が可変資本100Vを支出して労働力を買ひ、労働者がそれをもって100単位だけの必要生活手段をIia資本家から買ひ、そこでIia資本家はその売上代金を使って100単位だけの奢侈品をIid資本家から買う、という順序により完結する。この過程でIia資本家がIib資本家から買う100単位の奢侈品を、マルクスが「全奢侈品生産の半分」(“eine Hälfte der ganzen Luxusproduktion”)⁹⁾と呼んでいるのは、明らかに誤りであろう。第3図でも明瞭なとおり、100単位は全奢侈品生産の6分の1でしかない。おそらくマルクスは、第3図でいえば2段目にえがかれている1600Cや400Cの部分が、すでに第

I部門の(V+M)と交換されてしまった後の状態を考えていたのであり、「100v(b)は全奢侈品生産の残余のうち半分にあたる」と云うべきであったのだろう。

③ 仮定により資本家は収入の5分の2を奢侈品に支出するのだから、Iia資本家はその収入400Mのうち160を奢侈品に転態すべきであり、前記②の過程で100を買ったあと、次いで自ら用意している貨幣¹⁰⁾をもって60単位の奢侈品をIib資本家から買う。すると、この60はちょうどIib資本家の収入100Mの5分の3、すなわちかれらが必要生活手段を購入する割合にあたるから、かれらはその売上代金をもってIia資本家から60単位の生産物を買ひ、60の貨幣はその出発点へ復帰する。

④ 生活必要手段部門の資本家(Iia)は、その収入400Mのうち5分の3にあたる240を生活手段に支出するが、これは同じ部門内での転態であるから、第3図においては矢印が自己還流の形をとる。

⑤ 他方、奢侈品部門の資本家(Iib)は、その収入100Mのうち5分の2にあたる40を奢侈品に支出するが、これも又同じ部門内での転態であるから、④のばあいと同様に矢印が自己還流の形をとる。

かくして第II部門内の取引は完了するのだが、次に第I第II両部門間の取引が説明されなければならない。もちろん、1つの図で全体を示すこともできたわけであるが、図を徒らに複雑化することを避けるため、この2部門間の取引は、第4図としてこれを別に示すこととした。

第4図を組立てた原則も、今までの図と同様である。各(垂)部門内での転態(ならびに第3図ですでに示されたIia・Iib間の転態)にあたる部分は第2段目にかかげる。流通用の貨幣は太い実線で示し、それぞれがその出発点に還流する仕組となっている。ただ第4図では、簡単化のため、労働者階級を取引主体として表に出さず、矢印の途中にⒶの記号を入れ、特定の転態過程が一度労働者階級を経過するものであることを示してある。

10) この前提は適宜変更することができる。

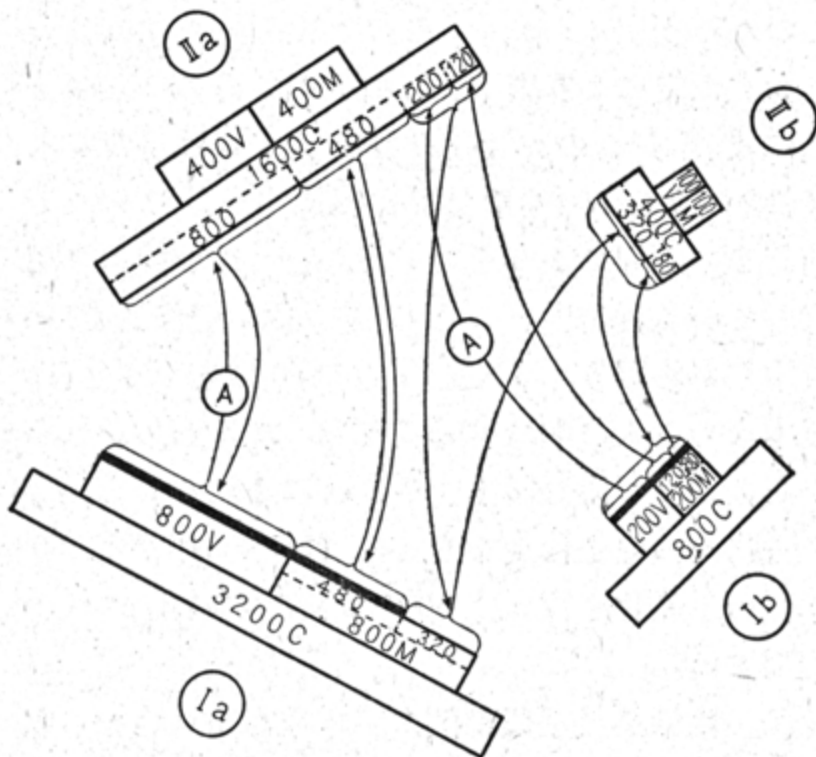
7) 前同, p. 527.

8) 前同, p. 527.

9) 前同, p. 529. *Das Kapital*, Buch II, (Moskau), p. 408.

さて転態の過程であるが、第I部門の2つの亜部門(IaとIb)が、流通のために必要な貨幣を用

第4図



意していると仮定し、まずこれら2つの亜部門の可変資本部分(800Vと200V)について考察する。Iaの800Vは最初労働者階級に支払われ(第4図でAをもつて示す)、労働者たちは受取った賃金でIIa資本家から200だけの生活手段を買う。するとIIa資本家はこの代金でもってIa資本家から同じく800だけの生産財を買い、貨幣はその出発点へかえる。Ib資本家も、かれらが用意した200Vの可変資本でまず労働力を買ひ、労働者は受取った賃金でIIa資本家から200だけの生活手段を買う。マルクスの仮定によれば、奢侈品でも生活手段でも、その原料や補助材料となるものは同じ種類と考えられているから、本来はIaとかIbとかいう区別をする必要はなく、ここで200の代金を労働者から受取ったIIa資本家は、自らの必要とする生産財を填補するためには、第I部門でさえあればどの資本家から買ってもよいわけであるが、ここでは転態過程をはっきりさせるため、Ia資本家から生産財を買うというふうを考える。すると、Ibの200Vとして始まった流通は、IIa資本家からIa資本家へゆき、Ia資本家はその200の代金でIb資本家から奢侈品を買い、最後にIb資本家はその代金で生産財をIb資本家から買うという経過をへて、貨幣は出発点に還流する。以上の部分をマルクスは要約して次のように

云う。「800Ivならびに200Ivが実現されるのは、労賃が消費手段1000Iicに支出され、したがって、労賃に投下された貨幣資本が復歸のさいIの資本制的生産者たちの間に均衡的に分配され、彼等の投下可変資本が貨幣で接分比例的に再填補されることによってである。」¹¹⁾

次に、IaとIbという2つの亜部門の剰余価値部分(800Mと200Mと合せて1000M)の転態について考察しよう。この点についてのマルクスの叙述は、必ずしも平明とは云いがたく、一読しただけでは、なかなかつかみにくい部分である。まずそれを引用してみよう。

「1000Imの実現についていえば、ここでも資本家たちは均衡的に(彼等のmの大きさに比例して)、Iicの残り全半分=1000から、消費手段での600IIaと400IIbとを引出すであろう。だから、IIaの不変資本を填補するもの[800Im]は、600c(IIa)からの480(3/5)と400c(IIb)からの320(2/5)=800を引出し、IIbの不変資本を填補するもの[200Im]は、600c(IIa)からの120(3/5)と400c(IIb)からの80(2/5)=200を引出すであろう。合計は1000である。」¹²⁾

ところで、この転態過程を第4図で見れば、非常にはっきりする。まずマルクスによって“diejenigen, welche das konstante Kapital von IIb ersetzen”と呼ばれているIb資本家は、200単位の剰余価値を、5分の3(120)は生活手段に、5分の2(80)は奢侈品に向けて支出する。その流通のための貨幣は、かれらが用意しているものと仮定する。Ibの120からIIaの120に向っている矢印は、この前者の購入を示し、この120は、さきにIbの可変資本が生活手段に転態したときの代金200と一しょになって、IIa資本家により生産財購入にあてられ、Iaの800M中の320に買い向う。するとIa資本家は、生産財を売ったこの代金320をもってIb資本家から奢侈品を320だけ

11) マルクス『資本論』(長谷部文雄訳、青木書店)、第2部、p. 531.

12) 前同、pp. 531—2. []内は訳者長谷部文雄氏の挿入であるが、必ずしも文意を判りやすくしてはいない。原文で“diejenigen, welche……”となっているのは「資本家」と解すべきであり、最初のはIa資本家、あとののはIb資本家と見るべきであろう。

買う。この320はIa資本家の収入800Mのちょうど5分の2にあたる。またIb資本家はその収入の200Mの5分の2にあたる80を奢侈品の購入にあてるから、IIb資本家は、あわせて400の奢侈品売上げを完了し、これがかれらの不変資本填補額に等しいから、かれらはその代金でもってIb資本家から400だけの生産財を買い、貨幣は出発点へ還流する。他方、Ia資本家のほうは、前述の過程ですでに800M中の5分の2にあたる320を奢侈品に転態したが、のこりの480(5分の3にあたる部分)については、流通用の貨幣を用意して、IIa資本家から生産手段を買い、IIa資本家はその代金をもって、Ia資本家から不変資本填補用の生産財を480だけ買う。かくして、この貨幣もその出発点に戻流する。社会的流通はこのようにして全部完了するわけである。

さきにケネー経済表のばあいについて行ったのと同じように、すべての転態が終ったあとの各階級の財保有状況や貨幣還流の仕方を別の図にして示すこともできるが、ここでは省略しよう。

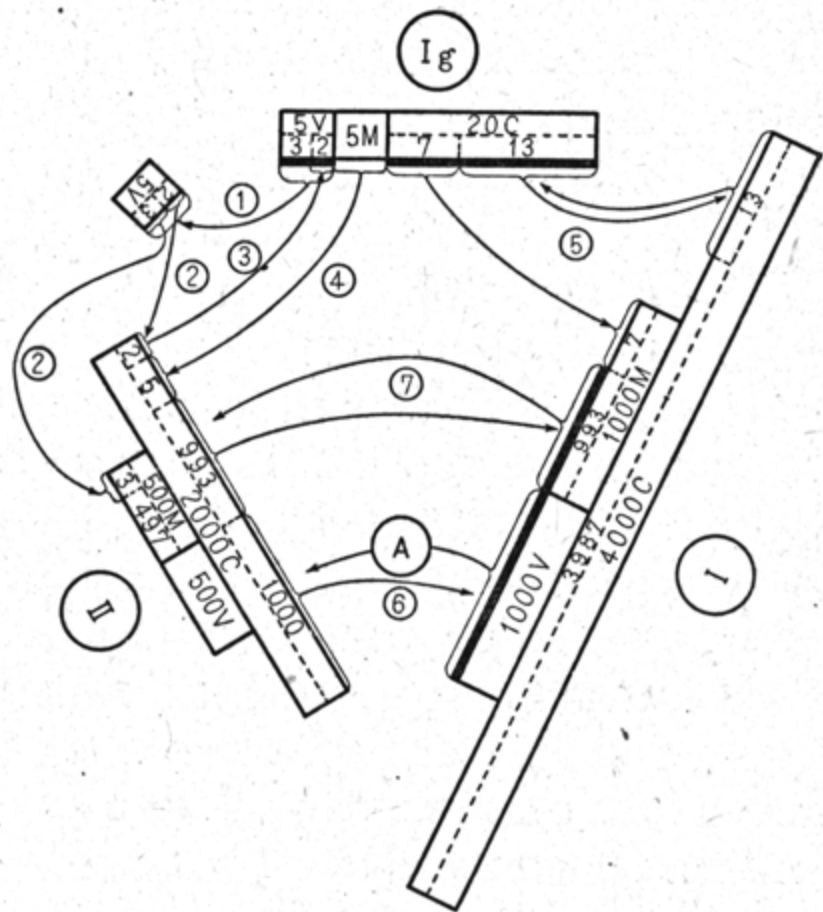
3

ケネー経済表の図化を応用してマルクス再生産論上の問題を解明しうる今一つの例は、貨幣材料再生産の問題である。この問題については、周知のように、ローザ・ルクセンブルクの批判¹³⁾があり、日本では山田盛太郎氏¹⁴⁾や越村信三郎氏¹⁵⁾による詳細な展開がある。解釈が統一されず論争に結着がつかないのも、一つには、マルクス自身がこの問題の展開を未完成のままにしておいたということによるものと思われる。「後に考察すべき……」と云いながら、エンゲルスによると、その約束された考察が原稿中には見あたらないとのことであり¹⁶⁾、エンゲルスもしいて敷衍していない。

そこで、われわれとしてはまず、できるだけマルクス自身の簡単な記述に則して、貨幣材料としての金の生産が明示的にとりあげられたばあいの

社会的流通を、図(第5図)によって検討してみよう。マルクスは、「金の生産は金属生産一般と同

第5図



じく、部門I、すなわち生産手段の生産を包括する部門に属する¹⁷⁾と云い、その金生産を数字的に30とみなし、その価値構成を――

$$20C + 5V + 5M$$

と仮定している。金生産が第I部門の一部であることを確認したとしても、マルクスの単純再生産のばあいの数字例において、それが4000C+1000V+1000Mの中に含まれると見るか、それともその外に加えられるものと見るか、あるいは適当に数字例を第I・第II兩部門にわたって作りなおした上で第I部門内に含まれるものと見るか、いろいろの解釈が成り立ちうる。しかし、前記の20C+5V+5Mがどのように転態するかについてのマルクスの未完成の叙述を見ると、一応は本来の第I部門(4000C+1000V+1000M)をそのままにしておいて、金生産亜部門Ig(20C+5V+5M)をその外に加えて社会的流通を考えていたようであり、したがって第5図は、その構想の上に作られてある。以下、マルクスの叙述と第5図の矢印とを対比してみよう。

16) マルクス『資本論』第2部, p. 620 参照。

17) 前同, p. 617.

13) ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』(長谷部文雄訳, 岩波文庫), 第1篇第5章参照。

14) 山田盛太郎『再生産過程表式分析序論』(改造社), p. 117 以下参照。

15) 越村信三郎『図解資本論』(春秋社), 第2巻(下), pp. 230—53 参照。

① 「5v についていえば、各産金業はさしあたり労働力の購買をもって、みずから生産した金をもってでなく国内にある貨幣の一部分をもって、始める。」¹⁸⁾このことは、第5図において、矢印①で示されており、太い実線が既存の貨幣を使っていることを示す。

② 「労働者はこの5vでIIから消費手段を買いとる。」そのことを示す矢印が2つに分れていることは、のちに説明。

③ 「IIはこの貨幣で生産手段Iを買う。かりにIIがI [Ig] から2で商品材料など(自分の不変資本の成分)としての金を買うとすれば、2vは金生産者I [Ig] に貨幣——すでに前から流通に属していた貨幣——で還流する。」問題は、のこりの3であるが、マルクスは第II部門の資本家が、500Mを全部消費してしまうかわりに、Igの労働者への売上代金として得た貨幣を3だけ蓄蔵すると仮定する。したがって、さきの矢印②で示された3だけの流通はIIMに向って「買」だけを形成し、「売」による還流がない。(マルクスはこの分が、最初IICから買われ、その上で貨幣はIIMに移され、販売用の消費手段がIIMからIICに移譲される、という説明を行っているが、そのように複雑化する必要はないと思う。)還流がないから、Igでは3だけの金が売れのこる。これをIg資本家は「造幣するか銀行券に換えるかによって」最初の可変資本5Vに相当する貨幣の補完を行う。すなわち第II部門資本家が貨幣蓄蔵を行うのに歩調をあわせて、新らしく生産された金が貨幣に転化してゆく。

④ 「(Ig)m について云えば、Igはこの場合つねに買手として登場しうる。それは金としての自分のmを流通に投じ、その代りに消費手段Iicを引出す。このばあい金の一部分は材料として利用され、したがって、生産資本の不変部分Cの現実的要素として機能する。そうしたことが起らないかぎり、それもまた、IImのうち貨幣で停滞する部分として貨幣蓄蔵の要素となる。」このマルクスの叙述によると、Ig資本家は生産された金

をそのまま流通に投じて消費手段を買い、その金が「一部分は」第II部門において生産手段として機能するというのであるから(そして、生産手段として機能しないかぎりでは、II 500M部分と取引きをし、「貨幣蓄蔵の要素となる」というのであるから)、第5図のIgからIIへ向う矢印④は一方的である。第5図では、図を簡単化するため、5Mのすべてが第II部門で原材料として使われると仮定してあるが、この簡略化は議論の本質に影響しないと思う。ただ注意すべきことは、さきの5Vの流通の結果生じた3だけの貨幣蓄蔵が、既存の貨幣の蓄蔵であったのにたいし、5Mの一部が蓄蔵されるというばあいには、それが新産金のまま蓄蔵されるという点である。しかしこの点も、第2年目からの流通を考えると、5VのうちIgに還流しない3については、Igの生産物が補完の役割をはたすのだから、単純再生産の一般的な姿としては、前記の①の流通の出発点を、2だけは既存の貨幣、3だけは新産金というふうに見なして統一化することもできるだろう。もっとも、新産金はどこまでも貨幣材料であって貨幣ではないということ、むつかしくいうなら、第5図に示された流通過程が全部既存の貨幣によって媒介されるように統一することもできる。マルクスじしんの叙述は、この点、一貫しているとは云いがたいのである。¹⁹⁾

さて、マルクスによる叙述は、以上のところまでしかない。しかし以上の分析方法をコンシステントにおしすすめれば、以下の点はおのずから明らかになると思う。

⑤ Ig 亜部門は、その不変資本を補填するために、本来の第I部門から20だけの生産手段を購入

19) 山田盛太郎氏はIgじたいが5Mのうち4だけを消費手段購入に向け、のこりの1を自ら蓄蔵するという解釈で表式の分析を行っておられるが、Ig部門は第I部門の一部なのだから、もし貨幣蓄蔵が第I部門資本家によって行われるのなら、それは本来の第I部門で行われると見たほうがよいし、又流通貨幣補填用以外にIgが金を売りのこすという仮定もおかしい。もしもこのばあいについて蓄蔵が行われるなら、マルクスも云うとおり「IImのうち貨幣で停滞する部分」として、第II部門の資本家により蓄蔵されると考えたほうが適当であろう。

18) 前同, p. 617. 以下, マルクスからの引用は pp. 617—20の間より。

しなければならない。これをもし、自らの生産物である金をそのまま流通に投ずるかわりに、あらかじめ用意された貨幣でもって購入するとすれば、第5図の矢印群⑤の示すように、7だけはIgによる購入を終えたあと、第I部門Mの中で停滞して蓄蔵貨幣となり、13だけは本来的生産手段と原材料としての金との交換を完了する。IMの中に3が停滞するのは、IIMの中に3が停滞するのと同様であって、Igにおいては、新産金7が貨幣化されて、当初保有されていた貨幣額を補完する。

⑥ なお本来的第I部門の可変資本1000Vは、矢印⑥が示すとおり、まず労働者階級に支払われて労働力に転態したあと(簡単化のため、そのことを④で示す)、労働者たちは受けとった賃金で第II部門から消費手段を1000だけ買い、第II部門資本家はその売上代金でもって第I部門から生産手段を買い、貨幣はその出発点に復帰する。

⑦ 第I部門の資本家は、すでにその剰余価値のうち7だけを蓄蔵貨幣とすることにきめているから、のこりの993Mを使い、第II部門から消費手段を買う。折りかえし第II部門の資本家は、その代金でもって993だけの生産手段を第I部門から買い、流通の役割を終えた貨幣はその出発点に復帰する。

以上でもって流通は完了し、30の新産金のうち、20だけは第I・第II両部門が生産手段として使うことを予定され、10だけはIg部門で流通手段としての貨幣補填に利用される一方、第I・第II両部門の資本家によって蓄蔵される貨幣に対応する。そこでマルクスは次のようにいう。

「単純再生産の場合でさえも、——この場合には

言葉の本来の意味での蓄積すなわち拡大された規模での再生産は排除されているとはいえ、しかも貨幣積立てまたは貨幣蓄蔵が必然的に包含されている、ということが分る。そして、こうしたことが年々新たに反復されるのであるから、資本制的生産の考察の出発点となる前提、すなわち、再生産の開始にあたり商品転態に照応する分量の貨幣手段が資本家階級IおよびIIの手にあるという前提は、これによって説明がつく。かような積立ては、流通貨幣の磨損によって失われる金を控除してもなお行われる。」²⁰⁾

マルクスの叙述を忠実に追ってゆくと、以上のとおりになるのだが、ローザ・ルクセンブルクが指摘したとおり、たしかにマルクスの構想はここでは純粹でない。貨幣材料としての金を問題としながら、商品一般の原材料としての金をも同時に考慮したり、単純再生産であるのに、貨幣材料の年々の磨滅をこえた貨幣蓄蔵を「必然的なもの」として想定したりしている点は、問題を必要以上に複雑化したものと云わなければならない。しかし越村氏が示したように、これらの点をよりわけ、それぞれの想定の下での一貫した表式数字例を作ろうと思えば作れることも、注意しておくべきであろう。

なお、本稿で行ったようなケネー表式図化の応用は、更に商業利潤の扱い方の問題に関連しても行いうると思うし、政府セクターを明示的にとり入れた再生産分析についてもきわめて効果的に行いうるが²¹⁾、本稿では紙面の都合もあって省略することにした。

20) マルクス『資本論』第2部、p. 260.

21) 拙稿「国民所得論における〈政府〉の位置」、『経済研究』1950年1月、pp. 10—17 参照。